

# 方向

第一一〇号 一九九〇年二月一五日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

歌人・大塚五朗 (1) 1990.1.26. 原田憲雄

はじめに

嵯峨野に遊ぶ人は、詩と夢とを忘れてはならない。嵯峨野の詩と夢は決してはやかなものではない。それは長い歴史と、閑寂な四囲の風物が醸し出すものであるからだ。しかもその長い歴史は世捨人、隠栖者、世に容れられない人、不幸な境涯を歎く人達の涙でうるほされた歴史である。そしてまたその自然は、さうした傷ついた魂のふるさとにふさはしいやさしさ、しづけさ、細々さをもつてゐる牧歌的なものである。

野々宮を囲む竹林のふかき、豊かき。その竹林の中を縫うて流れる幾筋かの道のかそけさ。薄く残つてゐる残雪に竹林を透して洩れる陽筋がさむざむと縞を描いて美しい。陽筋を受けた竹の瑞々しさは玲瓏として碧玉のやうに澄み徹り、陽筋をうけない半面は緑青色に冴え返る。しんと静かな道は涯もなく続いている。私の歩みはいつか音をしのぼせる。……

私はふと小石を拾つて竹林めがけて投げ込んだ。投げ込まれた石は幹から幹に、かあん——かん、かん、



かあさんと撥ね返つて遥かに飛び去つた。そしてその憂然たる金属性の音は笛の輪を描いて深々と消えてゆく。

前のは『嵯峨野の表情』の「嵯峨野に遊ぶ人に」という文章の一節で、『京都風土記』にも再録され、後の『京都風土記』の「嵯峨野点描」の一節である。著者は大塚五朗（本名、五郎）。この文章は、発表されてすでにほぼ半世紀、書いた人が亡くなって四十年をすぎ、描かれた嵯峨野もほとんど様変わりしたけれども、ラジオやテレビの嵯峨野を紹介する番組では、二つが組み合わさつてときどき朗読される。風物は滅びても、詩と夢としての嵯峨野は、文章のなかで生き続けているのであろう。

敗戦後しばらく勤めた新聞社で同僚だった人が、突然たよりをよこした。大阪梅田地下街の古本屋で、ふと手にとった『京都風土記』のあけたところがこの文章、心ひかれて買ってかえり、読んでいるとあなたの名が出てくる。ふしぎなめぐりあわせに驚いた。著者はどんな方なのか。というのである。

著者は、わたしにとっては、中学時代の一、二年に国語・国文を担当された教諭であり、中学卒業後は、個人的に短歌を指導された恩師；と説明し、歌集『日蝕の庭』巻末にするす略歴を紹介した。問うた人は、折りを見てさらにくわしく聞きたい、という。さて、わたしの先生についての知識を振り返ってみると、かなりあやふやである。それで、手もとの先生の著書によって「略年譜」をつくり、先生の夫人でいま群馬県にお住まいの大塚松子さんに、ほぼ次ぎの内容の手紙をそえて送った。



「伝記」といったおおげさなものを書くには、あまり知識もなく、家庭のひとつとしての先生、友人としての先生、教員としての先生は、わたしはその片鱗しか知りません。歌人としての先生を、と思ったのですが、これまた、わたしたちの師としての側面はとにかく、他の歌人との交流などは、知ろうともしていなかったことに思い当たりました。しかしこの略年譜に短歌作品はめこみ、「大塚五朗短歌全集」とでもいったものを作っておけば、ひとつのプロフィールを示すことにはなるだろうと思います。それにしても、奥様のお許しとお教えを得たくぞんじ、この冊を作りました。お差し支えない範囲で、以下の赤いボールペンで問うていることを中心に、ご記憶を記入していただければ、幸甚でございます。

まもなく夫人から電話をいただいた。聞き馴れた明るく若々しい声だが、「九十をこえたのですよ」といわれたので、ごぶさたにうち過ぎた歳月が痛切である。また一週間ほどして、冊子が返送された。記入された回答が正確で簡潔であり、さきに耳に響いた声とおなじく明るい文体であるのに感嘆した。

以上が、この稿をつくるにいたる経緯である。わたしのする事には粗漏がつきまとうが、縁あってお読みくださる方々の示教により訂正してゆき、将来の『大塚五郎伝』の基礎ともなりえたら、ありがたい。

資料として用いた先生の著書、参考書、(略称)は次ぎの通り。なお文中ではおおむね敬称を省略する。

歌集『山原』

一九三二年

(山原)

随筆集『嵯峨野の表情』

一九三九年

(表情)

隨筆集『京都風土記』 一九四二年 (風土)

隨筆集『続京都風土記』 一九四三年 (続風土)

歌集『日蝕の庭』 一九六七年 (日蝕)

隨筆集『京都風土記』 一九七六年 風土、続風土から抜粋編集した新書版。引用は、これにはよらない。

歌誌『水堯』水堯社 一九三九—四七年(水堯)

幼 時 (一)

大塚五郎は、一八九八年七月一八日、大塚広(ひろし)、もよの第五男として、長野県更級郡長官舎で生まれた。本籍は、長野県埴科郡松代町一五一〇番地。広は、このとき更級郡長であった。母もよは青柳氏、京都の人であったらしい。五郎の上に、博通(ひろみち)、通(とおる)、直(なおし)、志郎(しろう)の四男があり、女子はなかった。

このときは、明治三十一年にあたる。六月三〇日、大隈内閣が成立し、八月一〇日、第六回総選挙が行なわれ、一〇月一五日、岡倉天心・橋本雅邦・横山大観らが日本美術院を創立し、十一月二九日、『国民新聞』が徳富蘆花の「不如帰」の連載を始める。外国では、フランスで小説家のゾラがドレフュス事件につき大統領あての公開状を発表し、中国の清朝では、戊戌の政変がおこり、西太后が実権を握り、光緒帝が幽閉されている。



ある人の死

1990.1.30.

原田 慶

正月も終わりのころ

四年ぶりの冷えこみとかで

庭の小さな池は氷ったままだった

そんな寒さの日に寺へ

運ばれてきた亡き骸は

ろう細工のように黄色みを帯び

合掌した手に数珠をかけ

あおじろい顔はうつくしい

あなたはずっと学校の用務員をつとめたという

日誌には当番の教員が夕方

終わりの見回りを済ませてから

「異常を認めません」と記入する

それを引き継いであなたは夜をまもり

毎朝「異常なし」と

書き続けてきただろう

夜伽の娘や孫たちは傍でいっしょに横になり  
話し笑いさざめいている

このように人は生きそして死ぬのだから

「根のかぎりただひたすらに歩いてきました

どのように思う人があろうとも私は

異常を認めません」

昂然としてあなたが棺に

おさまったとき

「ちよつとこちらを向いてください」と声をかけて

葬儀屋氏が両手で頭をもちあげた

三日めの朝

わかれの式がすみ

寺を出てあなたは行ってしまった

夜ねむろうとして目を閉じると

経帷子に白い脚絆



わらじをつけ竹の杖をもち  
あなたがゆっくり歩いてゆく  
わたしは目を開き  
また閉じてなんども  
歩み去るあなたの後ろ姿を見た

## フウセン カズラ

1930. 1. 31.

雪まじりの冷たい雨の日は  
とおいビルの屋上で  
並んでゆれている干し物が  
いっそうわびしい気持ちにさせる  
ポケットに手を入れたら  
去年の秋のフウセンカズラの種が出てきた  
テーブルの上におくと  
もみくちやの殻のなかから

白いハートの彫刻をつけた一粒が

小石のような音をたててころがった

いつか冬の初めに

庭で芽生えていたこの蔓草を

部屋にうつして温めているといった人は

あれからどうしただろうか

若い日は悲しくて苦しくて

世界があんなにも重たかったのに

今はただ干からびてカラカラと

ころがっているばかり

## 雪がやんで

1990.2.1.

灰色のにぶい光りを放つ空

ガラス戸の外が明るい

木の枝から雪が落ちて



橙々色の実がはねあがる

今日もまた遠くで呼んでいる人がある

「オーイ オーイ」

いつまでも力いっぱい毎日きままって

叫んでいる

木の葉のしたの雪のトンネルを

メジロが出たり入ったり

じっとしていたら凍えてしまうだろう

郵便配達の自転車が

町にブレーキの音を響かせると

路地の奥と曲り角で

犬が吠える

低い屋根つづきの家で

いつまでも瓦の雪が消えないところは

夫婦が働きに出てなかが空だから

大通りの雪解けはもう乾いてきたらしい

自動車の走る音が軽くなった

三日前にはこの部屋に死んだ人が横たわっていたなんて

夢みたいだわたしは鳥の声を聞き

雪を見て冷たいと感じている

それが生きているということだろうか

すこし外へ出てだれかと挨拶でもして来よう

立

春

1990.2.4.

うすぐもり

だれもない庭に風が

ひとかたまり吹いて

ビワの葉がちょっとゆれた

カラスが電信柱と遠くの屋根にいて

ぐるっとあたりをにらんでいる

ときどき交代で



ポンプの柄のように身をこぎ

カーアカーアと囁く

どこからか聞こえてくる小鳥の声

大急ぎで通りすぎるヒヨドリ

なにかが食べ散らかしたクチナシの朱と

ころがり落ちた茶の実

リュウノヒゲの光る青い目

掃きあつめてみるとこれは極楽浄土のごみ

濃い紫のスミレが咲き

フクジュソウの芽もふくらんだ

子どもがやって来て

「あっカラス カラースなぜ鳴くの」

と歌ってくれた

そのあと子どもは笑いカラスは知らん顔をしていたけれど

これはまあなんと

おあつらえむきの立春です

久し振りに太陽が見えて、屋根に残った雪がすっかり解けたと思つたら、また今日は雨になった。木々の滴が重たそうで、気のせいか春めいてみえる。ほんとうは、寒さはまだこれからだということも誰かが知っているけれど、風呂屋の大きな煙突が、ガラスを透して見るとゆらゆらとゆれて、春のかけろうが立つように感じられる。煙突には細い梯子が上までかかっている、登る人を見たことはないけれど、いくらかくずれて獅子の口のようになつた筒先を空に向けている。

この町へ、今朝はまだ明けきらないうちから人がたくさん集まつてきた。風呂屋から南へすこし行き、そこから西へ百メートルくらい入つたところに福勝寺という寺があり、節分に御守りのひょうたんを出すので、それを受けにくるのである。毎年、節分まぎわになると、近くの町内へ、さわがせて申し訳ないがよろしくという挨拶状が届けられる。通り道にあたる所では騒がしいのかもしれないが、すこし離れていると気にもならない。朝はやく通りへ出てみて、異常なばかりにひたひたと静かに集まつてくる人々と、ゆっくり歩いたりしながら交通整理をしている数人の警察官に驚き、ああそうだったとすぐに思い出す。

この寺のひょうたんを、わたしは見たことがないけれど、人々が持っている紙袋から察すると、それほど大きなものではなく、爛徳利くらいのもものらしい。この寺の本尊は「宝珠尊融通御守」といい、弘法大師が唐へ渡つた時にえらい坊さんから授かつたもので、この珠を拝めば金銀財宝に恵まれ、七難も七福に転じるという。宝珠



を二つ合わせた形がひょうたんで、「金がようまわって、商売がうまくいきますように」と、西陣の織物屋の主人や、水商売のおかみさんが昔から参っていた。今ではいろいろな人が聞き伝えて来るようである。十時頃にその寺への曲り角までお餅を買いに行ったら、朝の人波は引いて、交通整理の制服の人もいなかった。バスの乗場に集まっているのは年とった女の人が多く、挨拶をして次々と自分の行き先のバスに乗って帰って行く。

「あんじょうひょうたん授からはりましたか」

「おおきに、もろてきました」

「よろしおしたな、あんたさんも毎年みえてますのどすか」

「へえ、ずっと寄せてもろてますのどっせ」

「そうどすか、まあ氣いつけて帰つとくれやす、ほなさいなら」

けっして立ち入ったことは尋ねたり答えたりしない。そういうことが、なんの役にもたたないことをほんとうによく心得ている。

今日は餅屋さんも、いつもよりたくさん作り、よく売れている。花見だんご、さくら餅、よもぎ網代傘、豆大福…… ケースの中は春である。花見だんごはふだんの日より、色が濃くあざやかに見える。ひょうたんと一緒に、ここで春を買って帰る人も多いのかもしれない。わたしはうちの本堂へのお供えに小さな白餅と花見だんごを買ってきた。

節分の行事は最近ますます盛んになり、赤や青の鬼が出たり、豆や餅をまく寺や神社がふえた。豆は、疫（や



く)を払うために体をなでて道に捨て、人に踏んでもらうものだったが、だんだん仕方を変えたものらしいけれど、神社などのは「福豆」というから福をもらうために拾ってくるのだろうか。わたしも去年は六波羅蜜寺で豆と餅を拾った。子どもがたくさん来て拾うので、こぼれ落ちていたのはなかった。一昨年、千本釈迦堂へ行ったときは、あまりにたくさんの人で身動きができず、拾った豆より足もとで踏まれてしまった豆が多いようだった。釈迦堂でも六波羅蜜寺でも立派な面をつけた鬼が出るけれど、それぞれの寺の由来にあわせて仕ぐさである。釈迦堂では赤と青の鬼が、おかめさんのやさしさにほろりとして、暴れるのをやめ、しおしおと引き下がり、六波羅蜜寺では六斎念仏の踊りによって鬼が払われてから、豆まきをする。わたしは今年の節分はどこへも行かなかった。新聞で見ると、紫式部ゆかりの寺とされる廬山寺の鬼は、追儼師の法弓と蓬萊師や福娘のまく蓬萊豆、護摩供で、ユーモラスに逃げる、と書かれている。廬山寺の鬼は豆を投げつけられるようである。

わたしの子どもの頃には、家の中や庭などに豆をまき、そのあとでいつも、年の数より一つ多く豆を食べていたけれど、ほんとうは厄年、十九歳や三十三歳などに、はやく厄を越えてしまうために、豆を一つ多く食べるのだそうである。残った豆は、その年はじめて雷が鳴った時に食べると雷よけになるといって、紙に包んで仏壇の奥に入れてあった。雷が鳴った時に食べたかどうか憶えていない。

ひょうたんの寺の縁起には、この宝珠のお守りで源頼朝が將軍の地位につき、豊臣秀吉もこの寺に祈願して天下をとったと書かれているそうである。わたしたちの住む辺りを秀吉も歩いたかもしれないと思うと、歴史上の人が急に現實味を帯びる。六波羅蜜寺のあたり、平家の屋敷では、捕らえられた少年の源頼朝が、清盛によって



殺されるところを異母弟の頼盛とその生みの母の池の禪尼に助けられた。このために平家が滅びることになってしまったというのだから、平家にとっては何ともくやしいことだったろうという気がする。そんな話を聞くと、この辺りには、さまざまの人の幽霊がさまよっているのかもしれないなあなどと思ったりするが、超能力も靈感もないわたしは、夜中に外へ出て何かを感じるようなことはなかった。

午後には、大きな煙突が薄墨色の煙をほっほとパイプをふかすように吐きはじめた。風呂屋の戸が開く先から、その前でタオルや桶を風呂敷に包んだお婆さんが、今日もちよこんと立っているのだろう。

## 中国の詩人と仏教

一

1990.2.2.

原田憲雄

### 四、皇帝がホトケをまつる

詩人科学者の張衡は一三九年に死にますが、それから四半世紀のちの一六六年秋に、後漢の第一〇代皇帝の桓（かん）帝が、黄老と浮図をまつりました。黄老とは黄帝と老子、浮図とはブツダであること、前号で説明した通りです。「後漢書」の記事には「黄老」だけしか記しませんが、皇帝の生涯を批評する「論」のところでは、

前の史書には「桓帝は、音楽を好み琴や笙が上手であった。芳林苑を手入れし、濯龍池のほとりに宮殿を建て華蓋を設けて、浮図と黄老をまつた」という。「国の発展しようとする時は人に耳を傾け、国が滅亡しようとするときには神に耳を傾ける」という言葉がある。その「神に耳を傾ける」ということでもあろうか。といっており、またこのまつりの直後に襄楷（じょうかい）という学者が、皇帝をいさめる上書をしていて、



聞くところでは、宮中に黄老と浮図のほこらを建てられた由。黄老の道も浮図の教えも、清らかで無為を貴び、万物を生かすことを好み、殺すことを憎み、欲望をおさえ、贅沢を止めることを主眼とするそうです。いま陛下は、欲望をおさえず、死刑・処罰が度を越え、黄老や浮図の道に背いています。それでどうしてお蔭がありましょう。ある説では、老子が夷狄の国に行つて浮図となつたとか。浮図は桑の木かげで夜を過ごすのにも三度を越えない、そこに愛着が生じてはいけなからだといいますが、これこそまさに精進といふべきです。天の神が、試そうとして美人を贈つたけれども、浮図は「これは血や肉を詰め込んだ袋だ」といつて顧みもみませんでした。そのように専一であつてこそ道が成就するのです。いま陛下は姪女艶婦で天下の麗人といわれるものを集め尽くし、グルメとかうまいものとかいつて天下の味よいものを独占しておられる。それでどうして黄老のようになれましょうや。

とあるので、黄老だけではなく、仏をもまつたことが分かるのです。記事にも書いておけばよいのに、それをしないのは、史官は儒者であり、儒者はたてまえとして中華思想に拠るからでしょう。襄楷は学者だから儒者の一人ではあるのですが、張衡と同じように天文・陰陽の学に精しかつたということです。だから科学者なのです。が、このころの科学は、占いや呪術をも含み、今でいう科学とはかなり違うものです。ともあれ、かれは黄老にも浮図にも関心をよせ、まじめに研究していたので、その上書には、当時すでに中国に来ていた仏教の主だった教義や、中国の老子が西方に行つてブツダになつたという説の生まれていたことを、いち早く伝えていきます。

この上書を審議した大臣は「星占いや神仏にかこつけてお上の悪口を言う者」として襄楷を投獄しようとする



のに、皇帝のほうがかえって「言葉はきびしいが、天文現象に基づいての意見なのだから」といつてゆるします。『三国志』で有名な諸葛孔明が「出師の表」で、

先帝（劉備）のいらっしやったとき、漢の朝廷の興亡についてよく論じあったものですが、桓帝や靈帝に話しが及ぶと歎息痛恨せずにはいられませんでした。

といったこともあって、桓帝は、次ぎの靈帝とともに、歴史家の評判がよくないのですが、物分りの悪い人ではないのです。ではなぜ孔明が嘆くようなことになったか。それを知るには、話を遡らさなければなりません。

張衡が死んだ時の皇帝は七代の順帝で、皇后は梁（りょう）氏でした。一四一年に、皇后の兄の梁冀（りょうき）が大將軍になります。大將軍は、日本の鎌倉時代の將軍のような地位だといえましょう。この梁冀がたいへんな男なのです。一四四年、順帝が三十歳で死に、その子の沖（ちゅう）帝が二歳で八代皇帝となり、母の梁氏が皇太后として、皇帝の代理で政治をするのですが、梁冀が好き気ままに権力を握り、国家の重要なポストは、自分の一族で占領します。沖帝は翌一四五年正月に三歳で死に、梁冀はあまり勢力のない皇族のなかから八歳の少年を選んで九代皇帝とします。質帝です。皇太后梁氏がやはり皇帝代理です。この婦人は、いい人なのですが、兄の我がままをおさえる力はありませんし、国全体のことより身辺に心の傾くのはやむをえません。質帝は、幼いながら利発でした。それだけに梁冀には我慢がならなかったのでしょう、翌一四六年、朝廷で梁冀を「のさばり將軍」と呼び、毒殺されます。九歳でした。次いで梁冀が皇帝に選んだのが、皇太后の妹と結婚させる予定だった皇族で、それが十五歳の桓帝です。桓帝も名だけの皇帝で、実際の政治はやはり皇太后と梁冀で切り回します。



皇帝が自分で政治をしようとするれば梁冀が許しませんし、梁冀に逆らえば皇帝でも殺されることは知らない者が  
ないので。皇后は、皇太后と梁冀の妹で威張り散らしますから、家庭でもおもしろくない。身の回りには梁冀  
のスパイが一杯です、志の高い政治家を近かつけることなどできません。美人を集め音楽でもやって憂さをはら  
すほかはないのです。一五〇年に、皇太后が亡くなり、皇帝にかぶさっていたくびきが一つとれますが、手足の  
出ないことは同じです。皇帝はじつところえ、様子を伺い続けました。一五九年七月、皇后の梁氏が死にました。  
皇帝は、信頼できる宦官(かんがん)に梁冀と仲のよくない宦官の有力者を集めさせ、梁冀討伐計画をうちあげ、  
八月、ふいに梁冀の屋敷を囲み大將軍のしるしを取り上げます。梁冀と妻は自殺し、一族はみな罰せられました。  
ここまではよかったです。皇帝はお礼の意味で、功績があつた宦官の有力者を高い地位につけます。宦官  
というのは宮中の女官を取り締まるために置かれた官吏で、女官と問題をおこさないように男性の機能を削除さ  
れた人達です。日本にはありません。中国やアラブ諸国では古くからいたようです。職務がらといえ、一種の  
障害者で気の毒な人達ですが、皇帝の身近かにいて親しまれ、権力を握ることもあるために、官僚やその予備群  
である知識人に憎まれ、したがって歴史家から常に「小人」として厳しい評価しか与えられません。宦官のなか  
にも立派な人はたくさんいたはずですが、かれら自身は歴史を書くことをしないので、悪いことのほうが記録さ  
れ、良いことは伝えられず、表彰されることも稀れなのです。賢帝が毒殺されたとき、そのことは世間にもほぼ  
知られていたらしいのに、二、三の官僚が抵抗しただけで、百官も太学生も怖れて、梁冀討伐に立とうとはしま  
せんでした。このたびのも、宦官が立たずに知識人が立ったとは考えられません。とはいえ宦官は、女官の管理



や、皇帝の身の回りの世話にはくわしくても、天下の政治をするだけの見識はありません。そうした人がとつぜん高い位置につくと、肝腎の仕事のほうはできずに、権力をふりまわして私利を計るようになりがちです。桓帝がしっかりしていたらよかったです。十五歳から二十八歳まで婦人と宦官に囲まれてきて、感情はこまやかでも政治家としての才能は育たなかったでしょう。梁冀を討った宦官に、梁冀におとらぬ横暴を許してしまつたのです。このときには宦官を批判する官僚や、それを支持する太学生などが出てきます。宦官にできたことがわれわれにできないはずがない、と発奮したのでしょう。宦官の情報網はしかし知識人のより発達していて、巧みに知識人集団をやつつけます。知識人の言論は、たてまえは立派なのですが、本音は人民や皇帝のためより、かれら自身の職場の拡大にあり、次ぎの詩句に歌うようなニセ知識人や偽善者も少なくなつたのです。

秀才試験に通つても読み書きできず：

挙秀才 不知書

清貧ですと自慢だが泥より濁つた連中：

寒素清白濁如泥

桓帝・靈帝時代の風刺歌謡（無名氏作）

皇帝は、即位このかた孤独であつて、数人の愛人と身近かな宦官だけがかれの孤独をなぐさめたのです。いかめしい大義名分論により、宦官のやわらかいことばに耳を傾けます。「人民」といっても、皇帝はその姿を目で見たこともなく、かれらの苦しみや悲しみが分からないのです。桓帝はやさしい人だが、そのやさしさが肌につれ目に見える範囲からあまり遠くには及ばない感覚的なものだったようです。皇帝ではなく芸能人にでもなつていたら、自分にとつても人にとつても幸福だったでしょう。というより、皇帝という地位そのものがそもそも人間にとつての幸福の原因とはなりえないのだ、というべきででしょうか。



桓帝の皇后の梁氏は子どもがなく、桓帝の愛人たちが妊娠すると梁氏は嫉妬し、そして愛人たちはみな流産しました。ある工作が行なわれたのです。梁氏が死んで、二人の皇后が相次ぎ、外にも皇帝づきの女性は数千人いたというのですが、女の子が三人生まれただけで、後継ぎとすべき男の子ができません。桓帝が黄老や浮図をまつたのは、男の子を得たいという痛切な願いからだったのでしょう。前年の一六五年に正月と十一月に宦官を老子の故郷といわれる苦県につかわし、まつらせているのが、それを裏がきしています。なぜ孔子をまつらないのか。このころの儒教はかなり黄老に近い方向に変質しているのですが、祈って子どもを授かるご利益は儒教にはなく、黄老は約束してくれるのです。それでも頼りなくて、ほとけさまにもお願いしようということになったのが一六六年の黄老・浮図のまつりだったので、皇帝に浮図という外国の神様を勧めたのは、たぶん宦官です。襄楷の上書はすいぶん厳しい内容ですが、皇帝が男の子を欲しがめる気持ちには同情しており、老子・浮図をまつることを非難するのではなく、まつっても老子や浮図の教えどおり節制し、賢沢をやめ、人民の幸福に努力しなければご利益はない、とっているのです。皇帝がかれを許したのは、厳しい言葉のうらにある襄楷のやさしさに感じたからに違いありません。三人目の皇后をたてる時、皇帝の愛人の出身が卑しいからといって、嫉妬ぶかい貴族の娘を推しとおしたのが、知識人に人気のある大臣で、後世の歴史家にも評判がいいのですが、その皇后が、桓帝の死後、自分の父と計って十二歳の少年を皇帝にします。璽帝です。皇后はまた皇太后として政治をし、後漢の混乱に拍車をかけるのですから、これだつてよかつたことにはならないでしょう。桓帝が死んだのは、黄老・浮図をまつた年の翌一六七年、三十六歳でした。



裏楮の作で残っているのはこの上書だけですから、詩を作ったかどうかは分かりません。その時代はすぐ『三  
 国志』の戦乱に続きますので、詩人の作品などほとんど戦火に焼け、かれに詩があっても残らなかったでしょう。  
 詩の現存しないかれを「詩人」と呼ぶのは差し控えるのが穏やかですが、あの上書の理路をささえる感性は、詩  
 人のものといってもよいように思われます。

## 父の呼びかけ

—法華經巡礼 421—

1990.2.8. 原田憲雄

まず、前回の3-10.拙訳の後半へこのとき、シャーリプトラよ、そのひとが…に当たる梵文を掲げておく。

atha khalu śāriputra sa puruṣas tam svakaṃ niveśanaṃ mahatā \*gni-skandhena samantāt saṃprajava-  
 litam dr̥ṣtvā bhītas trasta udvigna-citto bhaved evaṃ cānuvicintayet pratibalo\*ham anena mahala  
 \*gni-skandhenāsamspr̥sto \*paridagdhaḥ kṣipraṃ eva svastinā \*smād gr̥hād ādīptād dūreṇa nirgantvaṃ  
 nirbhāvituṃ / api tu ya ime mamaiva putrā bālakaḥ kumārakā asmīn aiva(ꣳ:eva) niveśana ādīpte  
 tais-taiḥ kṛḍanakaḥ kṛīḍanti ramanli paricārayanti/ imaṃ cāgāraṃ ādīptaṃ na jānanti na budh-  
 yante na vidanti na cetayanti nodovegam āpadyante/ saṃtapyamānā apy anena mahatā\*gni-skandhena  
 mahatā ca duḥkha-skandhena spr̥stāḥ samānā na duḥkhaṃ manasi-kurvanti/ nāpi nirgamana-manasikā-  
 ram utpādayanti ||



燃える大きな家の主人は、自分は無事そとに逃げ出たが、中で遊びほうけて逃げ出そうともせぬたくさんの子どものことを思い、かれらを助け出そうと考える。この主人が、次ぎにいう「その人」である。

3-11. その人はまた、シャーリプトラよ、力が強く腕が立つので、こう考えるだろう「わたしは力が強く腕が立つ。だからわたしは、これらの子どもをみんなひとまとめに腕に抱え、この家から逃げ出そう」と。そうしてまたこう考え直したとしよう「この家は入り口が一つで、戸が閉まっている。また子どもらは落ち着かず、がんぜなく走り回っていることだろう。あの子どもたちはこの大火炎で災難に会うかもしれぬ。だからわたしはあの子どもに注意しよう」と。それで子どもたちを呼びかける「おいで、あんたら子どもたちよ、できなさい。この家は大きな火のかたまりで燃え立っている。ここでみんなが、この大きな火のかたまりに焼かれ、災難に会うといけないから」と。

sa ca śāriputra puruṣo balavān bhaved bāhubalikaḥ / sa evaṃ anuvicintayed ahaṃ asmi balavān bā-  
hubalikaś ca / yan nv ahaṃ sarvān imān kumārakān eka-piṇḍayitvotsāngen 'ādāyasmad grhān nirga-  
mayeyam / sa punar evaṃ anuvicintayet / idaṃ khalu niveśanam eka-praveśam samvṛta-dvāraṃ eva  
kumārakāś capalāś cañcalā bala-jālīyās ca mā haiva paribhrameyub / te 'nena mahatā 'gni-skandh-  
enānaya-vyasanam āpadyeran / yan nūnam ahaṃ etān sampodayeyam ili pratisamkhyāya tān kumārakān  
āmantrayate sma / āgacchata bhavantāḥ kumārakā nirgacchata / ādīptaṃ idaṃ grhaṃ mahatā 'gni-sk-  
andhena / mā haivātraiva sarve 'nena mahatā 'gni-skandhena dhakṣyatkānaya-vyasanam āpatsyatha ॥



このところは、正本には、相当する訳文が全くない。妙本と梵文のあいだにもズレがある。「これらの子どもをみんなひととめに腕に抱え」のところを、妙本は「まさに衣械（えこく）を以て、もしくは机案を以て舎よりこれを出ださん」とする。語句そのものが分かりにくい、梁の法雲の『法華經義記』には「衣械をもって子をつつみ、机案をもってこれをささぐ」という。衣械はひろはばの肩布、机案は板の台をさすのであろう。梵文の「ひととめに腕に抱え」が、いくら大力の人でも実際上むつかしそうなので、道具をそえたのかもしれない。こうすることで中国人には理解しやすくなったのかもしれないが、「衣械は大乗の因に譬え、机案は大乗の果に譬う」（法華經義記）というような注釈が出てくると、はたしてよかつたのかどうか疑問である。もっともクマラジーヴァの拠つたテキストにこうあつたとすれば、話しはまた別だが。

「この家は入り口が一つで、戸が閉まっている」も、妙本は「この舎にはただ一門あるのみにして、また狭小なり」とする。閉まっているのと、狭いのでは、これも意味が違うが、まあ出入りするのに通りにくいというほどのところで、これは共通点が見出せるだろう。

①-2. だが、その子どもたちは、安全を願つてこの人が呼びかけたことが分からず、身震いもせず、驚きもせず、恐れもせず、慌てふためきもせず、考えもせず、逃げようともしない。また焼けるということがどういふことかを知りもせず、分かりもしない。そしてただ、あちらこちらに走つて行つては走つてき、それを繰り返しては父を見るだけだ。なぜならこれが幼稚さだからだ。

*atha khalu te kumārakā evam lasya hita-kāmasya puruṣasya tad bhāsitam nāvabudhyante nodvijanti*



notrasanti na samtrasanti na samtrāsam āpadyante na vicintayanti na nirbhāvanti nāpi jānanti  
na vijānanti kim etad ādīptam nāmeti / anyatra tena-tenaiva dhāvanti vidhāvanti punaḥ-punaś ca  
tam pitaram (W:/) avalokayanti / tat kasya hetoh / yathā 'pidaṃ bala-bhāvatvāt //

3-13. そこで、その人はこのように考える「この家は燃え上がり、大火炎で焼けている。わたしも、この子ども  
たちも、ここで、大火炎で災害に会ってはいけない。だからわたしは、巧みな方便で、この子どもたちを  
この家から出て行かせるようにしましょう」と。この人はまた、その子どもたちの好きなものを知り、その子  
どもたちは、たくさんのさまざまなおもちゃで、魅力があり、楽しく、愛らしく、美しく、こころを奪い、  
手に入れにくいものを望んでいることをわきまえている。そこでその人は、子どもたちの願いを知ってい  
るので、その子どもたちにもこう言った。

atha khalu sa pursa evam anuvicintayet / ādīptam idaṃ niveśanam mahatā 'gni-skandhena sampura-  
dīptam nā haivāhaṃ ceme ca kumārakā ihaivāneṇa mahatā 'gni-skandhenānaya-vyasanaṃ āpatsyāmahe /  
yan nv ahaṃ upāya-kausalyenemān kumārakān asmād grhān niṣkrāmayeṃam / sa ca puruṣas teṣāṃ ku-  
ārakāṇāṃ aśaya-jño bhaved adhimuktiṃ ca vijānīyāt / teṣāṃ ca kumārakāṇāṃ aneka-vidhāny anekāni  
kriḍanakāni bhavedur vividhāni ca ramaṇīyakāniśāni kāntāni priyāni mana-āpāni tāni ca durla-  
bhāni bhaveduḥ / atha khalu sa puruṣas teṣāṃ kumārakāṇāṃ aśayaṃ jānams tān kumārakān etad avo-  
cat /